

津波の教訓、静かに伝えていた石碑



岩手県にある宮古市重茂の姉吉地区。  
この地域は過去100年だけでも2度の津波を経験した津波の多い地域だ。昭和三陸沖地震では大津波が海拔約40m近くまで押し寄せ、地区の生存者はわずか4人だけだった。そこで、先人によってある石碑が建てられた。「ここより下に家を建てるな。」といったことのある石碑だ。これを守り、この石碑よりさらに20m高い場所に居住区を形成した。地震が起きたとき「家まで逃げれば助かる」といった意識を共通して持っているこの地域では今回の地震でも被害は最小限に食い止められた。

この経験をもとに建築で指標をつくる

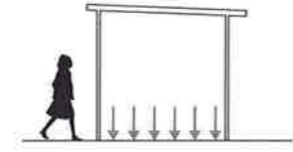
屋根を媒介として選択することで、けして街を分断するエッジではなく、津波の記録、非難時の目安ともなり、人の居場所ともなる。大規模な避難施設をつくるのではなく、指標が日常生活の居場所となることで、災害時の意識づくりに寄与する。

石碑の例



直接的に位置を表す

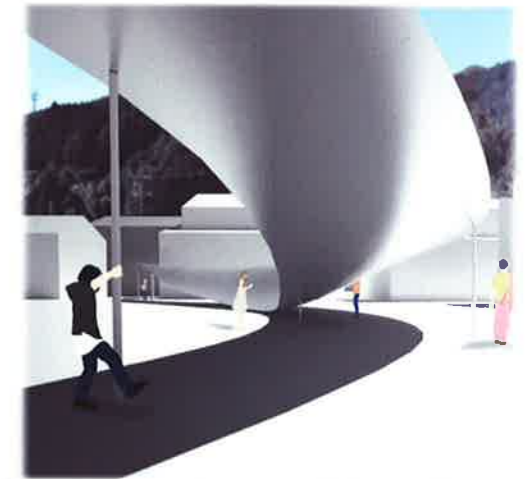
提案



影が間接的に場所を表す



ex. 釜石市平田地区 (■ 浸水域[海拔約10m以下])



海拔10mのラインに屋根が架かり、その下が人の集う場所となり、道となることでその場所への認識を高める

10 meters above

